

富士のあるまち

世界文化遺産登録へ

平成19年1月、「富士山」は日本の世界遺産としてユネスコへ推薦する候補を記した「暫定リスト」に登載されました。それは、富士山が雄大さ、気高さ、美しさなどを基盤とし、信仰や芸術を生みだした山として、世界にふたつとない価値を持っているからです。富士山の価値を構成する小山町の資産を紹介します。



富士浅間神社

木花開耶姫

富士山の神様「木花開耶姫このはなぐくやひめ」を祭神としています。須走口登山道の基点となる神社で、富士講信者が多く立ち寄り、33回を区切りとする登拝回数などの記念碑が約80基残されています。

宝永の噴火

宝永の噴火（1707年）では大きな被害を受けましたが、再建され（1718年）修理を重ねながら現在に至っています。この宝永の噴火で須走村には約3m以上の火山灰が蓄積し、未曾有の被害を受けました。しかし、幕府（関東郡代の伊奈半左衛門忠順）の援助もあり須山口や大宮・村山口よりも早い復興を成し遂げました。

富士講

江戸時代後期において、江戸を中心に「富士講」が隆盛すると、須走村には江戸をはじめとして全国から道者が訪れました。富士講では登拝の回数を重ねた人ほど尊敬を受け、境内にはその回数などを記録した多くの講の石碑が残っています。

西暦八〇七年 社殿造営

平成19年（2007年）には、御鎮座1200年式年大祭が執り行われました。



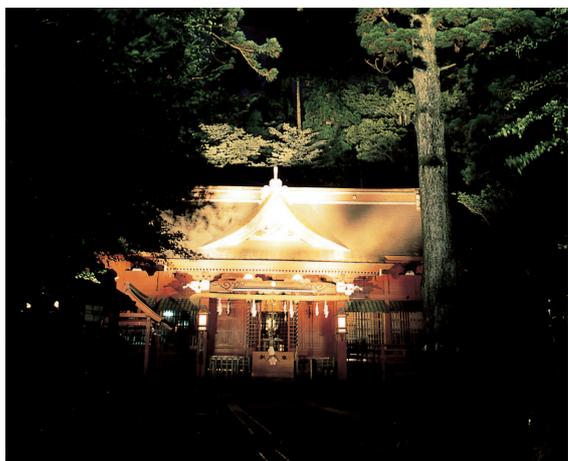


た。その後、社殿の享保年間の部材をそのまま活用した修復工事が施工され、現在は町指定文化財に指定されています。

須走口登山道

須走口登山道は富士浅間神社を基点に、現在の四合目付近の「御室浅間神社」、五合目の「古御岳神社」を経て、八合目で吉田口と合流し、山頂の久須志岳に至ります。六合目からは、浅間銘を有する最古の懸仏が出土して、室町時代初期には登山道が開けていたことが推測できます。登山道での役銭や山頂部の噴火口である内院への賽銭の一部は、富士浅間神社や須走村が得ることになっていました。

現在は「ふじあざみライン」を利用して、標高約2000mの須走口五合目まで車で行くことができます。



富士のあるまち

日本のでっぺんに登る

昨今の登山ブームで、富士登山客も年々増えています。富士山の登山道は5つあり、小山町は標高2000mの須走口を構えています。

須走ルートは森林限界が高く、珍しい高山植物が楽しめます。五合目以上は、国立公園の「特別保護区」「特別名勝」に指定されています。

富士浅間神社で山開き

須走登山道の基点は富士浅間神社。毎年7月1日には、富士山開山式が盛大に行われます。須走本通りは、地元須走の保育園、幼稚園、小学校、旅館組合などのパレードで盛り上がります。



富士登山道で見られる道しるべ。富士山の景観をそこわないように統一されています。

須走地区は標高約800mの高地であり、相模、駿河、甲斐三国の中継地として栄えました。富士登山の玄関口として、旅館や民宿などが多数あります。

緑豊かな須走登山道

富士山にある5つの登山道で、最も緑豊かなのが須走登山道。須走口五合目から歩き出すとすぐ「古御岳神社」があります。古御岳神社の祭神は、大山祇命このはなまぐさやひめで、木花開耶姫の父とされています。

標高2700mまでの樹林帯は、オン



日本のでっぺん、富士山頂に並ぶ山小屋。7月～8月の富士登山シーズンは混雑します



8月の富士山須走登山道。毎年多くの登山客が須走口から「日本のてっぺん」を目指します



砂走りを一気に駆け下りる

タデやイワツメクサなどの植物に恵まれて傾斜も緩やかです。
また、須走登山道は、富士山の東側を登るため、どこからでも壮大な御来光を拝むことができます。
昭和天皇が摂政宮当時（大正12年）、また皇太子殿下が裕宮殿下当時（昭和63年）に、須走口から富士登山されています。

ダイナミックな砂走り

須走下山道はダイナミックな「砂走り」が楽しめます。砂走りは、七合目の下から砂払い五合目まで約3kmを、ほとんどまっすぐに下る豪快な下山道です。

砂走りは砂れきの積もった急斜面で、一歩で2mほど下れます。